

『新刊紹介』

坪内稔典著

『正岡子規の〈楽しむ力〉』

田村修 一

「老人力」、「悩む力」など、「……力」という表現が近年よく使われるようになった。このたび紹介させていただく坪内稔典氏の著作は、正岡子規の「楽しむ力」がクローズアップされている。

正岡子規（本名・常規）が「子規」の雅号を使い始めたのは、明治二十二年、彼が二十二歳のときに咯血し、余命十年ほどと悟ってからであるという。「子規」とはホトトギスのことであり、啼くと赤い咽喉が見え、血を吐いているように見えることから肺結核の代名詞ともなっていた。二十歳そこそこで自らの有限の命と向き合わねばならない心情は想像を絶するものがあるが、子規はそれを受け入れ、受け入れるばかりか、自らを「子規」と名づけてしまうところにも、彼の「楽しむ力」が見出されるところという。

本書は子規の作品の鑑賞の手引きというよりは彼の伝記に重きをおく著作となっており、その生涯をたどるうちに、子規の「楽しむ力」がくつきりと浮かび上がる展開となっている。「子規」の名づけはその一例であり、彼は一種の名前マニアで、子規のほかにも糺祭書屋主人、竹の里人など無数ともいえる名を使い分けていた。

また子規は仲間たちと楽しむ力にも長けており、彼の主催した句会には漱石や碧梧桐、虚子らも参加した。また歌会も催し、その招待状の葉書は「十四日、才昼スギヨリ、歌ヲヨミニ、ワタクシ内へ、オイデクダサレ」と五七五七七の文面で送ったりもしている。しかしそのような遊びの精神を發揮する一方で、子規は「俳句分類」という、途方もない求道的仕事を継続していたこともおさえられている。

本書は「新書」という制約上、物理的分量はさほどないが、質的なボリュームを感じさせるものとなっている。しかし堅苦しさは全く感じさせず、司馬遼太郎の「坂の上の雲」からの引用があったり、句会についての記述では坪内氏の想像による参加者たちの会話があたりと、坪内氏自身の「楽しむ力」も發揮されているようである。

著者は坪内稔典氏であるが、「としのり」と読むのと、愛称？の「ネンテン」と読むのとでは人格の違いを感じるという。本書の著者はあくまでも「としのり」と明記されているが、ネンテンさんの要素もたぶんに含まれていて、面白くもまた正岡子規の偉大さがきちんととらえられた著作であるという印象を受けた。

(NHK出版 生活人新書、二〇〇九年十一月、二〇〇頁、本体価格七〇〇円)

(たむら・しゅういち 国立舞鶴工業高等専門学校教授)